



「港」

外国語と私

がい ぐく こ わたし

河竹 登志夫

かわ たけ と し お

私は語学者ではない。が、演劇研究を専門とし、40年間大学教員をつとめ、海外でもしばしば日本演劇の紹介に当たってきた。だから言葉というものの大切さは、身にしみている。

英語で講義や講演をする機会も、少なくない。しかし私の語学力は、たかが知れている。私の英語の基礎は、中学時代の3年間に作られたままだからである。そのかわりその3年間に、私たちはきびしい先生から、リーダーを徹底的に暗唱させられた。それが耳に残っていて、いまも役に立つ。アルファベットからでなく、万国発音記号から教えられたのも、ありがたかった。先見の明のある先生であった。おかげで1957年に初めてアメリカへ行ったとき、発音だけはひどくほめられて、びっくりしたものだ。

その後、早稲田大学で18年間、英語で日本演劇を教えたのも、貴重な経験であった。しかし、知っていることを知っている言葉で話すことはどうやら出来ても、ヒアリングの方は苦手だ。こんなこともある。1982年の夏、歌舞伎のアメリカ公演に、文芸顧問として同行したときのこと。

ノックスビルで万国博が催された年で、そこでも

公演があったが、それを成功させるために事前に歌舞伎について講演をしてほしいと頼まれた。在アトランタ日本総領事自身からの電話で、アトランタを振り出しに、シャーロット、メンフィス、ナッシュビル、ノックスビルの4州5都市を、4日間で単身巡回講演をすることになった。海外公演には1960年のアメリカ初演以来昨年までに12回も同行したが、こんなハードな旅は前後にない。

さて、アトランタでの講演のあとの質問が、さっぱり分からない。見かねて総領事が「私が通訳をさせていただきますし」と、自ら通訳を買って出てくださいました。南部は訛りがひどいとはいえ、やはり戦前の英語教育が会話をおろそかにしたことの後遺症である。その点、私の長女の中国語や末娘の英語は聴くのも話すのも自由自在。戦後の語学教育の美点と、若いころの留学経験の恩恵である。

しかし、そんな貧しい英語だが、講演のときも私は原稿を作って読むことはしない。せいぜいメモを用意するくらいである。ある程度の基礎と語彙があれば、多少まちがってもいい。伝えようという熱意をもって相手の、聴衆の目を見、反応をたしかめながら話すほうが、正確な英語を棒読みするよりずっといいと、私は信じている。

(演劇研究家・早稲田大学名誉教授)

えんげきけんきゅうか わせだいがくめいよきょうじゆ

- 1 外国語と私
河竹登志夫 (演劇研究者・早稲田大学名誉教授)
Foreign Languages and I
KAWATAKE Toshio (Drama Researcher, Professor Emeritus,
Waseda University)
- 2 読者から / FROM OUR READERS
- 3 教育実践レポート / JAPANESE LANGUAGE TEACHING AROUND THE WORLD
衛星放送日本語教育プログラム
「にほんごだいすき」の紹介
オーストラリア ニューサウスウェルズ州
小学校用テレビ番組
ニューサウスウェルズ州学校教育省主任教育官
エヴェリン・マーク
Introduction to the "Nihongo Daisuki", the ALS Program:
TV Program for the Primary School, the New South Wales
Department of School Education in Australia
Principal Education Officer with Curriculum Directorate
The New South Wales Department of School Education
Evelyn Mark
- 7 特別報告 / SPECIAL REPORT
1996年上海日本語教育事情
王 宏 (上海外国語大学教授)
Japanese-Language Education in Shanghai, 1996
WANG Hong (Professor, Shanghai Foreign Studies University)
- 10 日本語を研究する / RESEARCH ON THE JAPANESE LANGUAGE
音声学研究
音声教育の関連分野を中心に
土岐 哲 (大阪大学教授)
Research on Phonetics
Areas Related to Phonetic Education
TOKI Satoshi (Professor, Osaka University)
- 12 初級 授業のヒント / Beginning HINTS FOR TEACHING THE JAPANESE LANGUAGE
慣用句を覚えよう
Let's Learn Idioms
- 14 初・中級 写真で見る日本人の生活 / Beginning and Intermediate JAPANESE LIFE AS SEEN IN PHOTOGRAPHS
届ける -- 日本のいろいろな配達
Various Ways of Delivering in Japan
- 16 本ばこ (新刊教材・図書紹介) / BOOKSHELF: INTRODUCTION OF NEW TITLES
- 20 海外日本語教育Q & A / Overseas Japanese-Language Education Q & A
- 22 報告 / REPORT
海外日本語普及総合調査会について
水谷 修 (国立国語研究所)
Overseas Japanese-Language Education General Survey
Committee
MIZUTANI Osamu (The National Language Research Institute)
- 24 ニュース・編集部から / MISCELLANEOUS NEWS · FROM THE EDITORS

マークは、読者が教えている生徒のレベルを示します。

mark indicates the level of students whom readers are teaching.

読者から

日本語国際センターの先生方、お元気ですか。私は徐桂香と申します。いま、北京化工大学で日本語を教えています。1994年秋、日本語国際センターで研修を受けてから、いつも『日本語教育通信』をいただいて、毎号、興味深く読んでいます。たいへんいい勉強になっています。ありがとうございます。

『日本語教育通信』は内容が豊富で、自分の日本語の勉強にも、また学生に日本語を教えるときの参考資料としても役に立ちます。「現代日本事情」は、いろいろな面から日本の事情を知ることができるばかりでなく、ときどき授業で話題にすることもあります。特に第24号から掲載されている「日本語を研究する」は、たいへんいいコーナーだと思います。「外国人の教師は自分の母語についての学

問的な知識が必要になります。さらに日本語と母語との対照研究も必要です」と奥津敬一郎教授の「対照研究」(第24号)に書かれたことを痛感しております。

私は日本語と中国語との違いに興味を持っており、これからのいっそう、研究したいと思っています。
(中国北京化工大学外国学部 徐桂香)

*お手紙は編集部で要約・編集して掲載しました。

*編集部では、『日本語教育通信』に対するご意見や皆さんの学校の状況などを書いたお手紙をお待ちしています。

また、「授業のヒント」、「日本人の生活」、「海外日本語教育Q&A」など、具体的なコーナーに対する読者の皆さんの意見、希望、質問なども受け付けています。普段、疑問に思っていること、必要だと感じている情報などについて、編集部までお知らせください。

衛星放送日本語教育プログラム「にほんごだいすき」の紹介

オーストラリア ニューサウスウェルズ州小学校用テレビ番組

ニューサウスウェルズ州学校教育省主任教育官
エヴェリン・マーク

このコーナーでは、特色ある日本語教育を実践している
機関の教師の方々に、現場のコースデザインやコース運
営の状況について、紹介していただきます。



1. はじめに

ALSプログラム(Access to Languages via Satellite)は、ニ
ューサウスウェルズ州教育省のイニシアティブで始ま
った初等外国語教育のテレビ番組シリーズで、「にほん
ごだいすき」はその日本語のコースです。ニューサウス
ウェルズ州政府は、小学校高学年に外国語を学ばせる
ことと、教育の場におけるテクノロジーの果たす役割を
高めることを大きな方針にしており、このプログラムは
その両方をオーストラリアの小学校に提供しています。

番組は毎回生放送で、スタジオから放送衛星を使って
直接学校に送られます。そのためオーストラリア全土の
学校で同時に生徒が同じことを学ぶことができます。
またクラスルームの先生は、あたかも番組のプレゼンタ
ーと一緒に生徒を教えるような雰囲気が得られます。

1997年に放送されているレベルはつぎのとおりです。

- ・この番組を初めて見る生徒のための初級レベル
- ・この衛星放送、または他の日本語学習プログラムを経
験した生徒のための継続生レベル
- ・継続生レベルを終了した生徒のための継続生上級レ
ベル1

「にほんごだいすき」の最大の特徴は、スタジオとク
ラスルームのインターアクティブ授業です。視聴者は様
様な方法で、スタジオのプレゼンターにコンタクトが出
来ます。放送中に電話をかけたりファックスを送ったり
するだけでなく、自分達の写真や作品を郵便で送ること
も出来ます。また子供達は、放送時間外でも電話やファ
ックス、Eメールでプレゼンターと会話出来ます。

プログラムに参加する学校には、番組の手引きやテキ
スト類が送られます。これは各学級で番組を見たあと30

分のフォローアップ授業をすることが、このコースの大
切な要素になっているからです。

2. 番組の背景

「にほんごだいすき」は、オーストラリア全土の小学
校にむけて95年に試験放送が開始されました。この年
の放送に参加した生徒数は、ニューサウスウェルズ州
で二万人、その他オーストラリア各州の公立、私立校あ
わせて五万人になりました。96年にはその数はオースト
ラリア全土で十万人にのぼりました。97年もほぼ同じ数
の生徒が番組に参加しています。

「にほんごだいすき」の初級レベルは、現在週に三回、
オーストラリア国営のテレビ局SBSからも全国放送され
ています。これにより、衛星放送の受信設備をもたない
一般の視聴者も番組を見ることが出来るようになりました。
97年には「にほんごだいすき」のホームページも作
られ、番組の地平線が飛躍的に広がりました。

3. 番組の内容

「にほんごだいすき」の三つのレベルが対象としてい
るのは、八才以上の児童(小学三年生から六年生)です。
第二言語習得の研究によると、子供が母国語を確立する
この年齢が、外国語を学び始めるのにも最適の時期であ
ることが報告されています。

- ・初級レベルでは児童がコミュニケーションの基礎を身
につけるように、日本の子供達が日常使うのと同じ言
葉を学びます。ここではひらがなも紹介されます。
- ・継続生レベルのプログラムは、初級レベルの積み重ね
として作られ、言語的に少し複雑な「です、ます」の
言葉も状況にあわせて使われます。

・継続生上級レベル1ではそれに加えて、書く能力をも含めた言語能力の向上をめざします。

プログラムは言語学習および教育法のコミュニケーションアプローチに基づいて作られています。言語は実際に使うことによるのみ身につくため、学習者が積極的にプログラムに参加することが強調されます。「にほんごだいすき」のインターアクティブ授業はこの意味でも極めて大切な要素です。

番組では基本的に日本語のみが使われ、英語は日本語を紹介するパートでしか使われません。学習者は番組で使われる日本語をすべて理解する必要はありません。テレビというメディアを通して、学習者は何が起きているかを理解するヒントが与えられるからです。番組で使われる日本語は、小学生が同年代の友達と会話するのにふさわしいものに限られ、放送の中でくりかえして現われます。

トピックと語彙については、八才から十二才の児童にアピールするもので、しかも子供の生活にとって重要なものが選ばれます。たとえばこれまでに、自分たちについてのこと、興味のあることや趣味、家族や友達について、またからだや健康、それに夏休みや冬休みについてが番組で取り上げられました。

番組で使われる日常会話の日本語は、生徒の年齢にふさわしいだけでなく、学習者にとって理解しやすいものが選ばれ、それによって生徒達はコミュニケーションの基礎を効果的に学ぶことが出来ます。1997年にニューサウスウェールズ州が公示する小学校用日本語指導要領でも、このレベルの日本語が採用されています。

4. 先生へのサポート体制

番組を生徒達と一緒に見るクラスルームの先生が、有効にこのプログラムを活用出来るように、周到なサポートシステムがあります。これから放送される番組についての説明がされる教師向け放送、電話によるヘルプライン、教育省の日本語コンサルタントによる時間割についての助言や、学校訪問があります。

プログラムに参加している学校にはオーディオテープ、テキスト類がパッケージとして送られますが、それには以下のものが含まれます。

- ・番組毎に紹介される言語と文型をまとめたアウトライン
- ・番組のフォローアップに使う30分授業のプラン
- ・パッケージに含まれる教材の説明
- ・練習ドリル

- ・模範回答
- ・生徒の進捗をチェックするための指針
- ・フラッシュカード等の副教材
- ・オーディオテープとそのスクリプト

このパッケージを使ってクラスルームの先生は、番組をフォローする30分程の授業をすることが出来ます。同時に自分のクラスの時間割に日本語を効果的に組み込むよう期待されます。また学校単位でも、番組が扱うトピックや日本文化についての情報が与えられ、他の科目や学校での催し物に日本語学習の成果を活用することが出来ます。

5. 番組の評価

95年に実施された「にほんごだいすき」に関するアンケートによると、このプログラムは、各学校ですで行われている日本語の授業の補助としても、またこれ自体独立した外国語学習のコースとしても有効に使われていることが明らかになっています。

アンケートに答えた学校長のほとんどが、プログラムは学校全体のカリキュラム作成や、生徒の学習態度向上に好ましい貢献をしているとのべています。プログラムによって生徒達は、日本と日本人にだけでなく、プログラムが使用する衛星放送等のテクノロジーにも興味を示すようになり、他の科目、社会科や技術科等にも好ましい影響がみられるとのこと。また、生徒達が日本語を学習することによって、英語に対する理解が深まるというのも、非常に大きな利益です。

プログラムの最大の利点は、これまで日本語教育の機会に恵まれなかった遠隔地の学校でも、日本語や日本文化について学べるようになった事です。これはオーストラリアのような広大な国では、児童に公平に学ぶ機会をあたえるという意味で非常に重要なことです。

6. 今後の展望

プログラムは小学校高学年の四年間に、一連の継続学習を供給することを目的としています。1997年に開始されたインターネットは、外国語学習にテクノロジーの果たす役割を一層広げることにまりました。インターネットを使って生徒、先生だけでなく学校や父兄も日本語学習や様々なアクティビティに参加したり、手紙(メール)や自分達の作品を送ったりすることが出来ます。

1998年にはプログラムは四年目に入り、継続生上級レベル2の放送が計画されています。三年間の学習に続く

このレベルは、ちゅうがくこうこう まな にほんご 中学高校で学ぶ日本語への橋渡しともなります。

7. にほんごだいすきチーム

プログラム作成に携わっているチームのメンバーは皆さくせい たすま みな 経験豊かな日本語教師で、日本語とその指導法についてけいけんゆた にほんごきょうし にほんご しどうほう の広範な知識だけでなく、オーストラリアの小学校教育こうはん ちしき しゅうがっこうきょういく についても豊かな経験と理解を持っています。

このチームの責任者エヴェリン・マークは、20年せきにんしゃ ねん い 以上の経験を持つ外国語教育のベテランです。この他じょう けいけん も がいこくごきょういく チームのメンバーは以下の人々です。ほか

- 日本生活が長く、日本語とその文化に一言を持つプロフェッショナル、リンダにほんせいいかつ なが にほんご ぶんか いちごん も
- そのユーモアのセンスでプログラムに不可欠のスパイスを効かせるトシふ かけつ
- 言語教育と児童教育双方に天性の才能を発揮するヒラリーげんごきょういく じどうきょういくそうほう てんせい さいのう ぱっき
- 日本文化に深い洞察を持ち、教授経験豊かなチームの御意見番、トリッシュにほんぶんか ふか どうさつ も きょうしけんゆたご いけんばん
- 子供から老人まで、教授範囲の広さを誇る日本語教師メリルこども ろうじん きょうしはん い ひろ ぼく にほんごきょうし

Introduction to the “Nihongo Daisuki”, the ALS Program: TV program for the primary school, the New South Wales Department of School Education in Australia

Evelyn Mark,
Principal Education Officer with Curriculum Directorate
The New South Wales Department of School Education

1. Context

The Access to Languages via Satellite or ALS programs are developed by the Curriculum Directorate of the New South Wales Department of School Education. The programs provide curriculum support to meet the government's commitment to the extension of languages in primary schools from year 3 to year 6 and to enhance the use of technology in learning and teaching.

The programs are live to air programs and they are beamed directly from the studio via satellite to schools so that children can watch the broadcasts at the same time as they actually happen. The classroom teacher works in a team teaching situation with the teacher / presenter on the broadcasts.

Schools view two 30 minute broadcasts each week in each of three levels:

- a beginners' level
- a continuers' level
- a continuers' advanced level 1.

Schools can interact with the presenters in the studio in a variety of ways, through telephone and fax during the broadcasts and by sending in class photos and classwork for presentation on the program. Children can also contact the presenters outside broadcast times, using phone, fax and email.

Prior to the broadcasts classroom teachers receive print support materials to assist them in the face-to-face teaching components of the course. These provide an additional half hour of classwork to follow each broadcast.

2. Background

The Nihongo Daisuki programs began in 1995 during which the Japanese programs were broadcast nationally over the Satellite Education Service. Over 20000 students in New South Wales were involved in this pilot program and a further 30000 from government and non-government schools across Australia participated. In 1996 total numbers were extended and close to 100000

students Australia-wide took part in the programs. A similar number of students is enrolled in 1997.

Children across Australia can also watch the Nihongo Daisuki beginners' level course in Japanese on television Channel 28 (SBS) on three afternoons each week. In 1997 there will even be a Nihongo Daisuki Internet site for the students to visit.

3. Content and Curriculum

The three levels provided by the Nihongo Daisuki programs target children from 8 to 9 years of age onwards. Research into second language acquisition indicates that this is the optimum time to begin language study, it is an age at which most children have developed early literacy skills in their first language. The three levels that are available in 1997 are:

- a beginners' level for those schools new to the programs;
- a continuers' level for those schools that have been involved in satellite or other language programs;
- a continuers' advanced level 1 for those students who have completed the continuers' programs.

The beginners' level programs focus on informal language so that children can develop a broad language base with which to communicate. The students are also introduced to hiragana.

The continuers' level programs build on the beginners' programs and make links between informal and formal language, where appropriate.

The continuers' advanced level 1 programs build on the continuers' programs and aim gradually to provide enhanced development of all skills including writing skills.

The planning of the programs is based on the Communicative Approach to the learning and teaching of languages. It is based on the idea that language is learned through use. The Communicative Approach emphasises the active participation of the learner in the learning

process.

Language is presented in context in the broadcasts and English is only used in the cultural segments. It is not necessary for the children to understand every word at first, as the programs are designed to provide visual clues to help them work out meaning. The language used in the Japanese broadcasts is only that language that the children will need to use and is repeated throughout the programs.

The topics and the related language are designed to appeal to the 8-12 age groups and to focus on language which is meaningful and relevant to the children. They learn to talk about themselves and their interests and hobbies, about their family and friends, about health and holidays and so on.

The programs focus on informal language which is more natural for primary aged children. It makes the Japanese language accessible and allows these children to rapidly gain the skills required to communicate in simple everyday language. It is also the language recommended in the New South Wales Japanese K-6 syllabus document due to be released in 1997.

4. Teacher Support

Teacher support is provided through a teacher broadcast which provides demonstrations of practical classroom strategies that teachers can use in the face-to-face teaching components of the course. There is a Helpline for teachers to contact and a Japanese consultant is available to provide curriculum support through workshops and school visits.

Teachers are also provided with print and audio support materials for use in the classroom, including:

- unit and broadcast outline containing the language and structure introduced in the broadcast
- suggested follow-up lesson plans equivalent to half an hour
- detailed guidance on effective use of the resources provided
- worksheet masters for exercises and activities across a range of ability levels
- teacher answer sheets
- assessment strategies, including self-assessment sheets
- resources, such as flashcards
- audio tapes and accompanying scripts.

The ALS broadcasts and materials provide a total of two hours of language work per week. The broadcasts run twice a week for half an hour and each broadcast is followed by a face-to-face classroom lesson of half an hour to reinforce and consolidate the language taught during the programs.

Teachers are encouraged to integrate Japanese into the curriculum and activities and exercises that are provided give guidance to facilitate this process. Schools are provided with topic areas, specific language and culture, so that they can incorporate Japanese into their planning for other Key Learning Areas.

5. Evaluation

An evaluation of the Nihongo Daisuki course which was conducted in 1995 indicated that the design of the

course permitted teachers to use it to complement an existing language program or to implement it as a discrete, structured language acquisition program.

The majority of school principals reported that the satellite programs had contributed to the overall curriculum of the school and had improved the children's attitude to learning in general. The programs had increased the children's interest in Japan and its people and in the technology used to deliver the programs, which had positive benefits in other curriculum areas such as Human Society and Its Environment and Practical and Creative Arts in particular. Another enormous benefit was the awareness and improvement in children's English language skills.

The greatest advantage of the programs is the access provided to isolated and remote schools which offers these children the opportunity to study the Japanese language and to learn about the country and its customs.

6. Future Plans

The programs are designed to provide continuous and sequenced language study throughout four years of primary schooling. The development of an Internet site in 1997 will allow students to extend their use of technology in the language learning. The site allows children, teachers and the community to access activities and information, to contribute to a newsletter and to send work in.

In 1998 there are plans to develop a fourth stage in the programs - the continuers' advanced level 2 which will build on their previous three years of study and will be designed to facilitate the transition from primary to secondary Japanese learning.

7. The Nihongo Daisuki team

The writers and presenters are all experienced classroom practitioners with a depth of knowledge of the language and of language teaching methodology and an understanding of the needs and interests of primary school students across a range of ability levels.

Evelyn Mark, Principal Education Officer with Curriculum Directorate, who manages the team of writers and presenters from the New South Wales Department of School Education has been involved in primary and secondary languages teaching for over 20 years. The Nihongo Daisuki team consists of five specialist Japanese teachers:

- Linda Chiba - a committed professional who has spent many years in Japan studying the language and culture.
- Toshi Kurita - an accomplished linguist with a dry sense of humour which is vital to the success of the programs.
- Hilary Norrie - a talented language teacher with a strong background in primary and secondary Japanese teaching.
- Trish Takahashi - a highly qualified and experienced teacher of Japanese who studied in Japan and has an intimate knowledge of Japanese culture.
- Merryl Wahlin - a skilled language teacher who has taught Japanese to a range of students from kindergarten level through to matriculation.



1996年 上海日本語教育事情

上海外国語大学教授 王 宏

..... 1996年12月7日上海外国語大学主催の“上海市日本語人材需給の現状と見通しについてのシンポジウム”が開かれた。このシンポジウムには、中国側からは、上海市人民政府、外国企業のための求人会社、大学日本語科関係者が、日本側からは上海日本総領事をはじめ関係各団体など、計30余名が出席した。
この報告書は、シンポジウムの準備作業の一つとして1996年9月に行われた日本語教育調査とシンポジウムで討議された内容の一部をまとめたものである。.....

この報告書は、次の点において海外の日本語教育関係者も関心を寄せるのではないかと思われる。

1. 最近、中国日本語学習人口の増減がとやかく論議されているが、中国経済発展の“竜の頭”といわれている上海の日本語教育はどうなっているか。

2. 数年来、中国特に上海から来日する就学生の減少により、日本における日本語学校経営は苦境に立たされていると聞く。では、中国で日本語学校が最も集中している上海ではどうか。

3. ここ3、4年、国際交流基金主催の日本語能力試験は、来日就学生の減少に伴って、日本での受験者数も減少しているが、それに引き替え、海外での受験者数は増加している。それはなぜか。

今回の上海日本語教育事情調査は、1993年の全国調査をもとに、主に電話により在校生数を調べた。大学専攻日本語はその全数を調べたが、その他は一部抽出調査

し、1993年との増減率を見てみた。

1993年国際交流基金の調査では、中国の日本語学習人口は26.5万人である。そのうち上海市は23,770名で、全中国の9%を占め、都市別で1位になる。今回の調査から推定すると、1996年秋、上海市の日本語学習人口は1993年より約1割増である。そのうち、大学専攻日本語は4割半増、大学非専攻日本語は1割弱減、中等学校は倍増、成人日本語教育は横ばいである。

1. 大学専攻日本語

1990年上海市で専攻日本語（修士課程・本科・高等専門科を含む）を設けている大学は6校、在校生625名、1993年は9校949名で、1996年は13校1,380名に達し、96年は90年比121%増、93年比45.4%増となり、増加率は決して低くない。殊に、高等専門科は社会の当面の急にこたえるため激増している。

このように、大学専攻日本語は急増しているにもかかわらず、日本語能力を有する人材はなおも上海市のニーズを満たせずにいる。その主たる原因は1994年ごろからの日系企業の急増にある。現在、中国で日系企業が最も多い省・中央直轄市は上海であって、日本が上海の外国企業投資額の一位を占めており、日系企業は1920社、投資額45.5億米ドルに達する（出典：1996年9月末統計・上海市外事弁公室提供）。また1996年上海港と日本との輸出入貿易総額は上海税関の統計では142億米ドルで（出典：1997年2月1日上海『新聞報』）、上海に長期滞在する日本人は1万人を突破した（登録上は5,000余人）といわれている。

外国企業のための求人会社は、“英語科の卒業生はそ

上海市大学専攻日本語学生統計表

	1990年	1993年	1996年
上海外国語大学	223	356	400
復旦大学	76	89	87
華東師範大学	95	107	72
上海对外貿易学院	67	110	109
上海大学	101	106	173
同济大学		20	99
上海觀光高等専門学校	63	86	114
上海理工科大学		50	76
上海水産大学		25	53
上海師範大学			102
上海鉄道大学			20
上海黄浦区业余大学			18
上海科学技術職員労働者大学			57
合計	625	949	1380



の全員の就職を斡旋することは出来ないが、日本語科卒業生はいくらでもほしい”と言っている。つまり、日本語科の方がずっと売手市場だということである。

日本語人材の素質については、調査から見ると、日本語の口頭表現能力、勤務態度、業務実践能力は高く評価されているが、待遇にこだわる、知識面が狭い、仕事の熱心さが足りないなど、指摘されるものもある。

2. 大学非専攻日本語

1993年上海市27大学の非専攻日本語学生数は4,493名である。うち、第1外国語760名、第2外国語3,733名で(コラム1参照)、前者漸減、後者漸増の傾向にある。1996年14校の調査では、大学非専攻日本語学生数は1993年比7.1%減である。本科生としては普通の課目の一つ取るより外国語を一つ取った方が就職に有利なので、第2外国語としての日本語を選びたい。ところが、非専攻日本語の教師不足から、学校側では開講中止、受講者数制限などの措置をとっており、そのために学生数が減少しているのである。

3. 中等学校

1993年調査では、全国で日本語課目を開設している

中等学校は409校、学生11万人で、学生の91.9%は東北3省と内蒙古に集中している。中等学校の日本語学生数は年毎に減っているが、その主な原因は英語を学ばないと進学に不利だからということにある。

1993年の調査では、上海で日本語課目を開設している中等学校は8校、学生2,070名であったが、1996年調査では18校、学生4,337名となり、いずれも倍以上増えている。その原因は93年調査が不十分だったということもあるが、94年以降学校数・学生数が急増していることも事実である。

この18校のうち、2校が普通の中学・高校で、あとは、みな職業高校や中等専門学校であるが、今後、観光・経済貿易関係の中等専門学校や職業高校で日本語教育を発展させる余地は十分にあると思う。問題はやはり日本語教員不足にある。

4. 成人日本語教育

上海市の成人日本語教育は主として“业余研修学院”で行われるが、“业余”とは業務の余暇を利用したという意味である。1993年上海市业余研修日本語学習者は14,819名であったが、1996年14校の調査では学習者は93年比1%増である。

上海の业余日本語学習の経緯をたどると、1980年代後半から90年代のはじめにかけて、出国ブームのため学習者が急速に増え、1993年～94年ブームが冷めるにつれて下り坂となった。ところが、1995年からまた上海日系企業の急増によって学習者が増えはじめた。つまり、上海では1992年に出国ブームで业余日本語学習が最高潮に達し、1996年の学習者数はそれよりやや落ちるが、日本語学習熱は依然として高く、日本の日本語学校のような苦境は上海では全然見られない。

当 faced、上海での业余日本語学習の主な目的は上海の日

コラム1

中国の学校教育における日本語教育制度

中国の学制は小学校6年、中高校各3年、大学4年、修士・博士各3年である。このほか、職業高校と中等専門学校は中卒後3年と4年、高等専門学校は高卒後2～3年である。1970年代以降、中国の外国語教育は主に英語であって、日本語・ロシア語はその1%にも及ばない。英語教育は中学から始まるが、大都市では小学校4、5年からである。

いま小学校で日本語教育を実施しているのは大連市周辺だけである。中高校で、英語教育を行わずに日本語教育が実施されているのは、主に東北3省である。

大学・高等専門学校で日本語科(専攻日本語)が開設されているのは約100校。大学では大学生はみな非専攻

外国語を学ぶことになっているが、非専攻日本語が開設されているのはその約半数 500余校である。非専攻日本語には第1外国語と第2外国語とがある。第1外国語の日本語は本科1・2年の必修科目として240～280時間履修する。これはもともと中等学校で日本語を履修したもののために開設されるのであるが、一部大学・学科では初心者向けに仮名から教えているところもある。第2外国語の日本語は本科3、4年生の選択科目として120時間履修し、英語4級試験合格者が選択出来ることになっている。

日本語関係で修士課程がある大学は約20校、学生100余名で、博士課程は3校、学生僅少である。

コラム2

中国における日本語教師不足

1. 実情。下記統計表に見られるように、大学専攻日本語では、1990年に比べて93年は専任教師4.3%減に引き替え、学生は31.4%増で、教師不足は明白である。大学非専攻日本語教師増加率は学生より僅かに1%高いが、ここはもともと教師不足の甚だしいところである。中等学校では、教師18.9%減に対して学生9.3%減で、教師不足のため、日本語の授業を中止、または日本語クラス数を減らす学校もある。また、大学日本語教師担当コマ数はノルマ超過、クラス学生は定員超過、日本語教師はさらに副業として业余学校で授業担当。まさに負担過重である。その後遺症は大きい。

2. 出国・研修。規定によれば大学教師の資格は修士卒業以上であるが、実際には日本語修士卒業僅少のため、日本語本科生が卒業後すぐ教壇に立つ。ここ10年、これら若手教師は日本へ研修に行く機会に恵まれているが、研修期限を過ぎても帰国しない者が多い。中等学校教師は出国はおろか国内研修の機会さえ少ない。

したがって、昇進にも影響する。こういうわけで教師陣を離脱するものが続出している。

3. 待遇。現在中国の国家公務員・医者・教員の待遇は次第に改善されて来ているとはいえ、金融・貿易会社や外国企業との待遇上の格差はなお大きい。例えば、上海では大学新卒の月収は1000元（120米ドル）弱だが、日本語科新卒者が日系企業で働けば月収2000元以上になる。そのために、日本語教師志望者が少なく、たとえ日本語教師になっても、日系企業や金融貿易会社に転出したり、また出国研修してそのまま帰国しないのである。

中国日本語教師・学生数統計表

	専任教師			学生		
	1990年	1993年	±%	1990年	1993年	±%
大学専攻日本語	976	934	- 4.3	6,054	7,952	+ 31.4
大学非専攻日本語	1,219	1,357	+ 11.3	65,421	72,134	+ 10.3
中等学校	1,447	1,173	- 18.9	122,103	110,781	- 9.3
総計	4,010	4,105	+ 2.4	249,112	265,292	+ 6.5

系企業に就職することと、ある種の資格を取得するためであると言える。1で述べたように、日系企業の上海進出で大学日本語科の卒業生だけではニーズを満たせないで、业余日本語学習者も一役買って出るようになった。求人広告から見ると、日系企業は高等専門学校卒業以上の学歴と日本語能力試験2級以上の人材を要求しているようである。このため一部の业余研修学院ではこれに対応するコースを設けるようになり、また、日本語能力試験受験者も増えてきているのである。

上海外国語大学では1984年から、日本語独学検定試験を実施している。試験は毎年2回で、日本語6課目と国語・哲学・政治経済学3課目の試験に合格すれば高等専門学校の卒業証書が授与される。受験申込者は1990年代当初は毎回100余人であったが、1995年から急速に増え、1996年下半期は1,190名に達した。卒業生数は1990年から1996年まで累計281名である。独学検定試験のために設けられた学習班には、昼間班と夜間班がある。昼間班学生は2年間の学習後、高等専門学校の卒業証書を待たずに日系企業に就職する人が多いようである。これらの人は、上海周辺の工場現場通訳を担当するケースが多い。

日本国際交流基金主催の日本語能力試験は、中国では以前その参加者は一部の大学生に限定されていたが、数年前から社会人にも開放されるようになった。上海市では、就職上の必要から受験申込者は年毎に増え、1993年は800余人、1994年は2,000余人、1995年には2,500

余人、そして1996年には5,200余人に激増した。上海でのTOEFL受験者の激減とは裏腹である。

上海市では50才未満の幹部はコンピュータと外国語（英語か日本語）の試験にパスしなければならないことになっている。上海市の初級日本語年2回の試験参加者は、1995年705名、1996年1,115名である。

このほか、職級昇進を申請するにも、外国語の試験にパスすることが要件の一つになっている。そのために、日本語を勉強する人も少なくない。

上記日本語試験の盛況からも、上海成人日本語教育発展の一端を窺うことができよう。

現在、业余日本語学習班の90%以上は初級日本語である。教師レベルなどの関係で、多くの学校が中上級日本語課程を開設出来ずにいる。

以上述べた1996年上海日本語教育事情から見て、1998年予定のアンケート調査では、もし中国でのその調査が十分なものであれば、中国日本語学習人口は、1993年調査より多少増えるのではなからうか。

参考資料：王宏 1993年中国日本語教育事情調査報告
1990年との比較（日本語教育事情報告編『世界の日本語教育』1995〔第3号〕国際交流基金日本語国際センター編集発行）

第5回

音声学研究

音声教育の関連分野を中心に

大阪大学文学部 土岐 哲

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究についての情報をおとどけしています。今回のテーマは音声です。

1. はじめに

音声学が発展してきた過程を考えると、音声教育が大きく貢献していることが分かります。ある言語音の特色は、その言語を母語とはしない人々によって、まずは客観的に意識されやすいからです。一方、その言語を母語とする者にとっても、学習者による、その言語音本来の姿とは異なる現象に直面して初めて本来の姿を意識するということが多いものです。音声の教育にかかわる研究は、大変幅が広いと言えます。教育という以上、学習者だけではなく教師側のことも考えなければならないからです。また、教育の相手が(1)外国語話者、(2)日本各地の方言話者、(3)言語の運用や音声器官に何らかの障害のある人、などによっても研究方法が違います。ここでは、外国語話者に対する日本語音声教育の研究を中心に述べます。

2. 音声教育史・音声教育論

この種の研究は、近代以降のものが中心となります。それも、当時の教師達が影響を受けた可能性のある書物や教師自身の考えで作られた音声教材等が検討資料の中心になります。もともと、教育場面の一瞬一瞬は消えて行くもので、学習者も教師も、自分がどのように意識して学んだかとか、どんなつもりで教えたかについて客観的に記述するのは難しいからです。しかし、日本語教科書などを見ると、日本語を客観的に考えようとした人々

の積極的な姿勢が見られるなど、当時の音声教育についていろいろ考えさせられます。

音声教育論は、学習者に対して目標言語の音声をなぜ、どの程度教えるべきか等について考えるものですが、大きく分けて(1)学習者に生じる問題を構造的に解説しながら、問題解決のための方法を中心に言及しているもの、(2)方法論というよりは、学習者の置かれた立場、学習後の問題等について考えるもの、などがあります。

3. 音声教材分析

音声教材は、作者やその教材を選択した教師達がどんなシラバスに従って日本語音声教育を実施しようとしたかを探る手立てとなるものです。作者の意図とそれを使って指導する教師の扱い方が全く一致するとは限らないにしても、音声教育の内容を知る上で、ひとつのパラメータとして考えることはできるでしょう。また、日本語音声の説明をする場合に、どのような言葉を用いているかを見ると、作者が日本語音声をどのように見ているかを知ることができます。(例：母音の無声化「unvoicing-, devoiced-, voiceless vowels, whispered syllable など」)

4. 対照音声研究

言語の対照研究のはじまりは音声面からであったといわれます。この種の研究がされるようになった背景などを考えると、世の中の動きと無縁ではないことが伺われます。戦後、アメリカとの関係が緊密化され、アメリカ



人学習者の増えたことなどが英語との対照研究を生み、英語で説明する日本語の教科書が増えました。戦後間もなく、東南アジア諸国から賠償留学生を受け入れた頃には、その留学生たちの母語との比較対照をきっかけとして生じた資料も見受けられます。ただ、題材の殆どが単音レベルか音節レベル、語アクセント・レベルであって、イントネーションまでは扱っていません。それは、一つには、対照する他方の言語でもイントネーション研究はまだ十分に進んでおらず、資料がなかなか得られなかったからでしょう。

5 . 中間言語研究

1970年代に入ると、言語教育研究も大きく変化します。それまでの対照研究、誤用研究では、学習者がどんな問題を起こし、どの程度に不完全さを引き起こすかが話題の中心でした。学習者は絶えず何かの問題を抱えていて、進歩発展の途中にあるものとして扱われましたが、中間言語研究の考えでは、学習者（A語話者）の話す目標言語（B）は、A Bのいずれでもなく、中間言語という、一種の独立した人格を認めようという考えが基本です。しかし、いくらA Bどちらでもないといっても、学習者の音声を聞けば、その人の母語が分かる部分も多いということ。もう一つは、A B双方の特徴を微妙に保持している音声を観察するには、その違いを厳密に聞き分けられる能力が必要なため、その研究に取り組む人の数には限りがあるということです。また、日本で中間言語研究が一般に浸透した時期、音声研究の流れが単音や音節のレベルから韻律研究に変わり、中間言語研究の殆どはアクセントやイントネーションをテーマとしたものです。なお、この時期には、音声分析機器が急速に発達し普及しました。

6 . 実践報告等

この種の研究には、従来の理論を音響分析機器の機能を使って応用したものと、従来あまり行われてこなかった分野の理論を再編成して実践に結び付けたものなどがあります。いずれの場合もデータの取り方や書き方は簡単ではありません。一口に実践報告とは言っても、どんな人が、どんな人に対して、どのように実施した結果なのかによって成果も微妙に変わってくる可能性が残されるからです。

7 . 母語話者や学習者による音声の認識や評価についての研究

聴覚音声学に関わる問題です。これまでの音声教育では、図解説明などで解説を付け加えたとしても、やはり最後は教師の言う通りに繰り返させてきました。しかし、その繰り返しを学習者が果たして教師の思ったとおりに受け止めているのかどうかはよく分かりません。その時の反応がうまく行かなかった場合、その原因が単に発音の仕方にあるのか、それとも発音以前に、モデルの音声を認識する段階で問題があったのかななどについては、十分に検証されていないようです。わずかに認知心理学の研究者によって非常に限られた範囲での実験報告などが知られているだけでしたが、最近は、音声学や音声教育の分野からもこの音声認識に関する研究が見られるようになってきました。

8 . むすび

日本語音声教育についての資料が豊富にあるとは、まだ言えません。ただ、まだ刊行されていないものの、各大学院等に提出された修士論文などを見ると、大きな可能性を秘めた基礎研究的論考も見られますから、今後に期待できます。なお、上記の他に、「教師のスピーチ・スタイルについての研究」なども考えられます。

どんな研究でも、基礎研究と応用研究があります。日本語教育などを考えた場合、ともすると、どうすればすぐ上手に教えられるか、などと応用的手段を考えたいものですが、きちんとした基礎研究の知識がなければ、当然よい応用には結び付きません。

参考文献

- 杉藤美代子（編）（1989・90）『講座日本語と日本語教育 2・3 日本語の音声と音韻（上・下）』東京、明治書院
『音声学会会報 日本音声学会70周年記念号特集「音声研究の展望」』（1996）東京、日本音声学会
服部四郎（1984）『音声学』東京、岩波書店
天沼寧他（1978）『日本語音声学』東京、くろしお出版

授業のヒント

じゅ ぎょう

今回は絵を見て会話や話をつくる練習をしました。
今回と次回は顔の部分の名前を使った慣用句をとりあげます。

テーマ 慣用句を覚えよう(1)

かん よう 句

目的・教えること もく てき おし
顔の部分の名前を使った慣用句の意味と使い方 かお ぶぶん なまえ つか かんようく いみ つか かた
学習者のタイプ がく しゅう しゃ
初級後半から中級 しょきゅうこうはん ちゅうきゅう
クラスの数 にんすう
一人～何人でも ひとり なんにん
準備するもの じゅんび
顔の絵など かお え

慣用句とは、ことばとことばを組み合わせ、それ全体で特別な意味をあらわす連語や文のことです。例えば、「腹を立てる」ということばは、「怒る」という意味で使われます。「骨が折れる」ということばは、本当にけがをして骨が折れた時にも使いますが、「苦労する、大変だ」という意味で使われることもあります。

慣用句を覚えることは、日本語の表現を豊かにするだけでなく、日本語のおもしろさを体験することにもなります。また、みなさんの国の慣用句とくらべてみれば、文化の違いの勉強にもなるでしょう。

今回は特に、顔の部分の名前を使った慣用句を取り上げて、いろいろな形式の練習問題を紹介します。日本語には他にも体の部分や動物や植物などの名前を使った慣用句がたくさんありますので、参考文献を見てください。

ここで取り上げる七つの慣用句

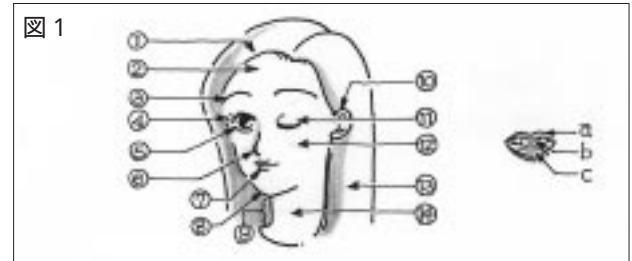
1. 耳が遠い
2. 鼻が高い
3. 目をめすむ
4. 口が軽い
5. 歯が立たない
6. 首にする
7. あごで使う

教え方(練習の方法)

練習の前に：顔の中の部分を表わすことばを確認しましょう。

図1のような顔の絵を用意して、顔の部分の名前を日

本語で言わせたり、書かせたりします。



初級で初めて顔の部分の名前を教えた時に「ふくわらい」のゲームを使った人は、それをもう一度利用するのもいいでしょう。



(注)「ふくわらい」：タオルなどで目が見えないようにして、顔の絵の紙の上に目や鼻、口などの部分を置いて顔を作るゲーム。お正月によく遊ぶ。

顔の部分の名前を確認したら、次のような練習問題を出してみましょう。(練習問題の答えは次ページの【練習問題の答え】を見てください。)

・練習問題A <意味の推測>

次の慣用句はどんな意味でしょうか。例文を読んで、意味を考えましょう。

1. 祖父は耳が遠いので、私はいつも大きい声で話してあげます。
2. 娘さんは勉強もスポーツもよくできるので、ご両親は鼻が高いでしょう。
3. 私の弟はよく母の目をめすんでテレビ・ゲームをしています。
4. あの人は口が軽いので、秘密にしていることを言わない方がいいですよ。
5. この問題は難しくすぎて、私には歯が立ちません。
6. 社長は、会社のお金をめすんだ社員を首にしました。
7. あの人は人をあごで使うので、もういっしょに仕事をしたくありません。

・練習問題B <意味の確認>

次の慣用句は他の日本語ではどのように言うことができるでしょうか。

左の慣用句と右の表現で同じ意味のものを線でむすんでください。

- | | | |
|-----------|---|--------------------------|
| 1. 耳が遠い | ・ | a. 他人に見つけられないように何かをする |
| 2. 鼻が高い | ・ | b. 仕事をやめさせる |
| 3. 目をぬすむ | ・ | c. いばって命令する |
| 4. 口が軽い | ・ | d. 耳が悪くなってよく聞くことができない |
| 5. 歯が立たない | ・ | e. 強かったり難しかったりしてとてもかなわない |
| 6. 首にする | ・ | f. 自慢できることがあって、得意になる |
| 7. あごで使う | ・ | g. 言っではいけないことを話してしまう |

・練習問題C <慣用句の穴埋め>

次の文を読んで、()の中に適当な顔の部分の名前を入れてください。

- ()が軽い人は他人に信用されません。
- 彼は年上の社員も後輩も()で使っています。
- 人質は犯人の()をぬすんで、逃げました。
- これは、()が遠い人が小さい音を聞きやすくする機械です。
- 不況になって、経営者はたくさんの人を()にしなければならなくなりました。
- 先生は、「学生がスピーチコンテストで優勝したので()が高いです」と言っています。
- 私達のチームは大学生のチームにぜんぜん()が立たなくて、0対10で負けました。

上の三つの練習問題はどの順番で使ってもかまいません。練習問題Bのaからgの部分は、学習者の国のことばを使って書きかえてもいいと思います。

【練習問題の答え】

- A. Bの答えを見てください。
 B. 1 - d, 2 - f, 3 - a, 4 - g, 5 - e, 6 - b, 7 - c
 C. 1. 口、2. あご、3. 目、4. 耳、5. 首、6. 鼻、7. 歯

参考文献
 豊富な文例つき 分野別・日本語の慣用表現』(1992) 小笠原信之著 専門教育出版
 『すぐに使える実践日本語シリーズ おぼえて便利な慣用句(初・中級)』(1994) 田仲正江、間柄奈保子共著 専門教育出版
 『まんがで学習シリーズ おぼえておきたいきまりごとば(慣用句)事典』(1992) 内田玉男著、村石昭三監修 あかね書房発行
 『言いたい内容から逆引きできる 例解慣用句辞典』(1992) 井上宗雄監修 創拓社発行
 『日本語教育事典』(1982) 日本語教育学会編、小川芳男、林大、他編集 大修館書店

今回は顔の部分の名前を使った慣用句の練習を考えました。ただ慣用句を丸暗記させるだけでなく、いろいろな方法を使って練習させることを考えてみてください。

次回は、絵を使った慣用句の練習を紹介します。さらに、いろいろな国の慣用句を紹介して、日本語と比べてみます。それでは、また。

このコーナーの担当者：久保田美子、八田直美(日本語国際センター専任講師)





写真で見る

日本人の生活

届ける 日本にほんのいろいろな配達はいたう

今回から、このコーナーでは、国際交流基金日本語国際センターが発行している日本語教育用『写真パネルバンク』シリーズを使って、初等中等教育機関で日本語を教える先生方がどのように日本人の生活を紹介できるかを提案していきます。また、文型、単語、漢字は、初級の学習者でも読めるようにやさしいものを選びました。初回の今回は、ますます便利になっていく日本の配達事情を写真やグラフと共に紹介します。

郵便 配達



郵便局の人は、赤い自転車やバイクに乗って、手紙やはがきや小づつみを配ります。家や会社に配ることを「配達」といいます。配達は月曜日から土曜日まで、1日に1回あります。配達する人を「郵便屋さん」とよぶ人もいます。

「毎日、ごくろうさまです！」

大きな新聞社は、朝と夕方の2回、新聞を作ります。朝の新聞を「朝刊」、夕方の新聞を「夕刊」といいます。新聞は、駅で買うこともできます。ほとんどの新聞配達の人、アルバイトです。

新聞 配達



毎度ありい！

ごくろうさま

出前

食べ物の配達「出前」といいます。出前のバイクは、後ろに大きい台がついています。出前は、電話をかけて注文します。食べ物を受け取ってから、お金をはらいます。日本そば、ラーメン、すし、ピザなどの出前があります。





前の家から新しい家^{あた}にうつることを「引っこし」といいます。日本の引っこしサービスは、家の中での荷づくりから、新しい家^{なか}に運びこむまでやってくれて、とても便利です。とくに三月と四月は、引っこしサービス^{はこ}はとてもこんでいます。

引っこしサービス

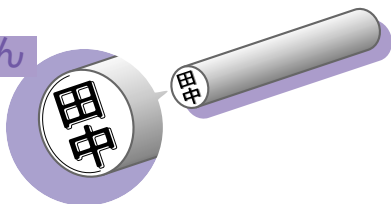
1つのところから、べつのところへ小さいものを運ぶサービスを「宅配便」といいます。宅配便は1976年にはじまりました。今では、郵便よりも人気があります。それは、宅配便の方が、はやくて便利だからです。

宅配便をたのむ時は、近くの店へ持って行ったり、宅配便の人が取りに来てくれたりします。お中元やおせいぼ、最近では重い旅行かばんやスキー、ゴルフ道具までが、宅配便で送られています。

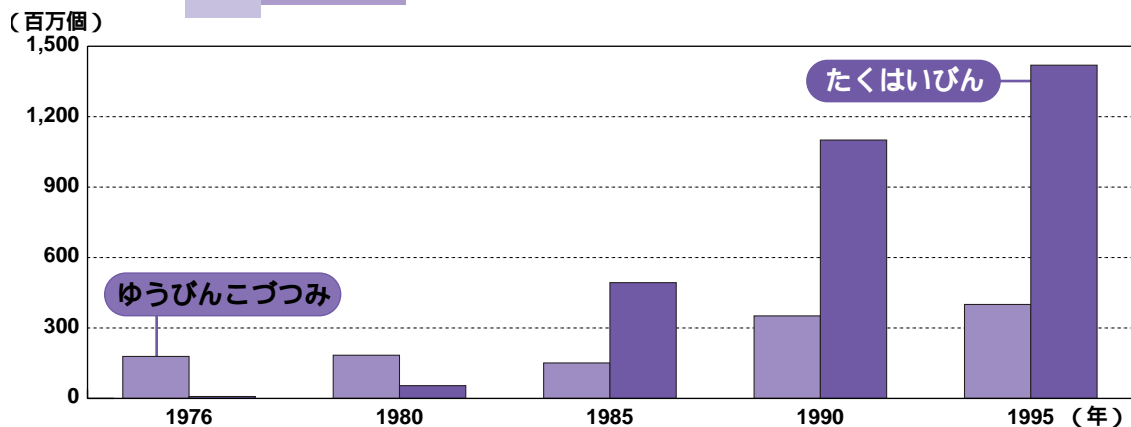


宅配便

印かん



宅配便ののび



資料提供：平成9年第46回
（総務庁統計局編）より作成
ヤマト運輸 経営企画本部
日本統計年鑑

このコーナーの担当者：荒川洋平、小玉安恵（日本語国際センター専任講師）



「日本語の教材や図書に関する新しい情報がほしい」という海外の先生方の声をよく聞きます。このコーナーでは、最近出版された日本語教材や参考書を中心に紹介していきます。紙面の制約上、一回に多くの本を紹介できませんが、「海外の先生にとって使いやすい教材」「授業や研究の役に立つ本」、また、「知っているると便利な図書・資料」などを取り上げます。

データ凡例 1 著者 2 出版社 3 刊行年月 4 ISBN 5 ページ数 6 定価(税込) 7 その他

勉強にも授業にも、いろいろ役に立つ初級文型の絵

『絵でマスター にほんご基本文型85』

データ

1 村野良子 2 凡人社 (〒102 東京都千代田区平河町1-3-13 菱進平河町ビル1階 / TEL:03-3472-2240 FAX:03-3470-2129) 3 1996年9月 4 4-89358-360-35 5 78ページ 6 2,310円 7 別冊 STUDENT STUDY GUIDE 付き

本冊と学習の手引き

本冊の各ページには、基本的には一つの文型が紹介されています。紹介されている文型の例文は、すべて仮名で書いてあります。絵で表されているキーワードで、各文型の入れ換え練習ができるようになっています。絵が表すキーワードの意味が分からなくても心配ありません。四角い枠の中に、仮名で単語や表現が書かれています。目次には文型と文型を使った例文がでているので、勉強したい文型のページをすぐ選ぶことができます。目次の文型は、やさしいものから難しいものへと並べられています。

別冊「学習の手引き」は、次の～が英語で書かれています。文型を使って表現する目的、文型を使う練習の例文(日本語)とその英訳、文型を勉強するとき、注意しなければならないこと。

教室活動のリソース

文型の絵は、著者が日本語を教えるとき実際に使ってきた教材です。各文型を

使って表現する場面や、入れ換え練習のキーワードが、分かりやすく描かれています。絵を描くのが苦手な教師や、絵カードがない時には、この本を利用するといいでしょう。

では、この本の絵を使ってどんなことができるのでしょうか？

媒介語(母語または共通語)を使わずに、新しい文型を教えたり、文型の口頭練習をさせることができます。場面の説明やキーワードを、絵で示すことができるからです。

各文型の絵は、その文型以外の表現にも使うことができます。写真のページの絵を見てください。この絵は「N1のN2」を練習するために描かれています。けれども、「Nが好きです」や「Vています」の練習にも使えるのです。たとえば、「あおきさんは おおきいかばんが すきです」または「あおきさんは おおきいかばんを つかっています」「あおきさんのかばんは どれでしょう?」といった練習も、写真の絵でできます。

単語を絵の中から探すゲームもできます。四角い枠の中の仮名を読んだり、新しい単語を復習するとき、このゲームが使えます。

リスニングの練習にも、絵を使うことができます。教師が日本語で言った単語や説明を聞いて、学習者があてはまる絵を探すゲーム

ムです。

いろいろな場面を表す絵がありますから、絵を並べかえたり選び出したりして、お話や物語を作る活動もできます。

絵の場面を、知っている表現や文型を使って、できるだけ詳しく説明する活動も面白いでしょう。

この本は、教師の工夫でいろいろな使い方ができる本です。



本文p.6



別冊p.3

『にほんごであそぼう！ パズル式日本語』
しきにほんご

データ

1 北嶋千鶴子、関麻由美 2 凡人社 (〒
きたじま ちづこ せきま ゆみ ほんじんしゃ
102 東京都千代田区平河町1-3-13 菱進平
とうきょうと ちよだく ひらかわちやう りやうしんひら
河町ビル1階 / TEL:03-3472-2240
かわちやう かい
FAX:03-3470-2129) 3 1996年12月
ねん がつ
44-89358-362-X576 ページ
61,050円
えん

遊びながら使える
あそぶ つか

この本は日本語のクロスワードパズル集です。やりかたはふつうのクロスワードパズルと同じです。日本語で書いてある「縦のかぎ」と「横のかぎ」の説明を読んで、適当な言葉の中にかたかなで書きます。説明の文を読んでも答えがわからないときは、絵を見て答えを考えることができます。このようにパズルを使って遊びながら、日本語の勉強ができるようになっていきます。

どこからでも使える
つか

パズル集は< PART1 言葉編 >と< PART2 会話編 >に分かれています。パズルの数は全部で30組あり、それぞれのパズルはトピック別と場面別になっています。

< PART1 言葉編 >には、次の20のパズルがあります。

1. 「挨拶」 2. 「国」
あいさつ くに

3. 「野菜・果物」 4. 「メニュー」
やさいくだもの めんじゆ
5. 「着る物」 6. 「身につける物」
きるもの みつけるもの
7. 「店」 8. 「乗り物」
みせ のりもの
9. 「道」 10. 「部屋」
みち へや
11. 「台所」 12. 「トイレ・風呂場」
だいどころ びるお
13. 「動物」 14. 「スポーツ」
どうぶつ てんき
15. 「職業」 16. 「天気」
しごつ けいようし
17. 「病気と体」 18. 「形容詞」
びやうき からだ けいようし
19. 「動詞」 20. 「数えましょう」
どうし かぞ

また、< PART2 会話編 >には、次の10のパズルがあります。

21. 「人を紹介する」
ひとしょうかい
22. 「買物をする」
かひもの
23. 「道を聞く」
みちをきく
24. 「電車に乗る」
でんしゃの
25. 「喫茶店に入る」
きっさてんはい
26. 「電話をかける」
でんわをかける
27. 「訪問する」
ほうもん
28. 「郵便局に行く」
ゆうびんきょく
29. 「病院に行く」
びょういん
30. 「料理をする」
りょうり

このようにパズルはトピックや場面別に分かれていますので、興味や必要に合わせて、どこからでも始めることができます。また、パズルの答えは< PART3 解答 >に出ているので、答えが正しいかどうか自分で調べることができます。

いろいろな学習者が使える
がくしゅうしゃ

いろいろなレベルの学習者が使えます。
がくしゅうしゃ

たとえば、初級前半の学習者の場合は、内容を見て、できそうなところから始めればいいと思います。また、初級後半～中級の学習者は、自分の日本語力を試すためにも、復習用にも使えます。

説明文の漢字には全部ふりがながあり、初級前半のレベルの文型が使われています。それでも難しい学習者の場合には、教師が説明文を学習者の母語に翻訳すれば、よりわかりやすくなると思います。

いろいろなやり方で使える
かた

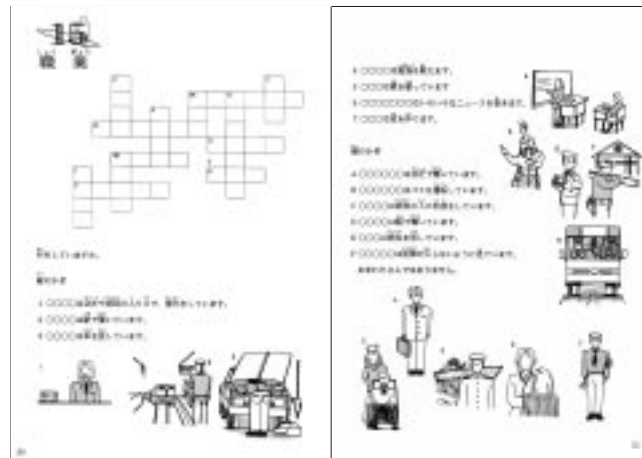
このパズル集はいろいろな使い方ができます。たとえば、学習者が自分一人です楽しむ独習用として使えます。また、教室の中でグループに分かれて、数人で協力しながらパズルの答えを考えることもできます。どのグループがいちばん早くできるか競争することもできます。教師が黒板に書いたり、OHPシートにすれば、クラスみんなで一緒に考えることもできます。もちろん、日本語の勉強から離れてことば遊びの道具としても使えます。

絵教材集としても使える
えきょうざいしゆ

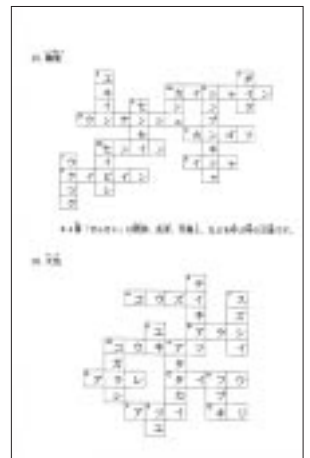
また、この本の中にヒントとして描かれているたくさんのイラストは、教師が語彙を導入するときに必要な絵教材として使うこともできます。



pp.30 ~ 31



p.69



” ニュースを使って「読む・聞く・話す」を総合的に学べる教材 ”

『新聞で学ぶ日本語・読んで話す現代の日本』

データ

1 水谷修、水谷信子 2 The Japan Times
 108 東京都港区芝浦4-5-4 /
 TEL:3453-2013 FAX:03-3453-8023)
 3 1996年12月4日 44-7890-0863-0
 5146ページ 62,100円

これは、中・上級学習者を対象とした教材で、英字新聞The Japan Timesに連載したCommunication Cuesの記事をもとに作られました。

この教材は、全部で60課からなり、各課は見開きの2ページで構成されています。まず、200字程度の本文(新聞記事例)、次に単語リスト(漢字の読みと英訳付き)、そして「内容チェック」の穴埋め問題が2~3問、各課で取り上げた記事内容を扱った2~3往復の会話例

(知人同士のていねいな会話と親しい間柄のくだけた会話の二つ)その応用としての談話練習と続きます。本文、会話例にはすべて英訳が付いています。また、数課ごとに応用記事としてナマの新聞記事も五つ取り上げられています。

この教材の特徴は四つあります。現代日本社会を理解する助けとなる題材を幅広く取り上げていること(例えば、「大卒者の就職率、いぜん厳しく」「女性が一生に生む子どもの数、最低に」「羽子板市、始まる」「地震に強い住宅のポイント」などの記事例があります)、読んだり聞いたりして理解するだけでなく、理解した内容について人と話すという総合的な練習ができるような題材を提供し

ていること、易度に関係なくどの課からでも学習が始められるように本文にある単語をもれなく単語リストで拾っていること、各課の新聞記事例をラジオやテレビのニュースの調子で言い換えた音声テープがついていること、です。

学習者の興味・関心、専門に合わせた活用ができる教材ではないでしょうか。



pp.90-91

” だれでも読めるひらがな日本昔ばなし ”

『日本昔ばなし』

データ

1 さいとういおえ他 絵、ラルフ・F・マッカーシー 英文 講談社インターナショナル(〒112 東京都文京区音羽1-17-14 / TEL:03-3944-6492 FAX:03-3944-6323) 3 1996年9月4日 各47ページ 5 各1,020円

ひらがなが読めるようになり、学習時間200時間が過ぎたころ、学生は、よく簡単な、例えば、絵本のような読み物を読んでみたいが、なにか適当な読み物はないだろうかと聞いてきます。そんな時いつも適当なものがなく、教師は困ります。「日本昔ばなし」はそんな時に推薦できる本なのです。

このシリーズは、講談社のたくさんの絵本の中から代表的な昔話11話を選んで、シリーズ10巻にしたものです。11話は『ももたろう』『かくやひめ』『うら

しまたろう』『いっすんぼうし』『はなさかじじい』『したきりすずめ』『かちかちやま』『さるかにがっせん』『きんたろう』『ぶんぶくちやがま』『ねずみのよめいり』です。各巻は絵巻物のような日本の絵が中心で、物語はそれに添えてあるだけです。ひらがなだけで書かれているので、学習時間200時間前後の文法知識があれば、十分読めます。絵や物語は、大人でも楽しめます。また、ページごとに絵の邪魔にならない場所に物語の英訳もついています。巻末には難しい表現について英語の簡単な説明もあり、読みやすくなっています。

一人で楽しんで読むだけでなく、クラスで読んで聞かせること

もできます。また、英訳もついているので、日本語がまだ十分でなくても、日本の昔話が楽しめます。



『かくやひめ』



『日本語文法セルフマスターシリーズ6 文の述べ方』
にほんご ぶんぽう

データ

1 森山卓郎、安達太郎 2 くるしお出版
もりやまたくろう あだちたろう しゅつぱん
(〒112 東京都文京区小石川 3-16-5 /
とうきょうと ぶんきょうく こいしかわ
TEL:03-5684-3389 FAX:03-5684-4762)
3 1996年10月 44-87424-129-8
5 150ページ 2,100円

本書のタイトル「文の述べ方」というのは何でしょうか。ちょっと考えてみましょう。

例えば、ある出来事が本当に起こったかどうか、その「確かからしさ」を話し手が判断するとき、日本語では「～だろう」「～かもしれない」「～に違いない」「～はずだ」などの文型を使いますが、本書ではこれらのような文末の表現形式を、特に「文の述べ方」と考えます。そして、そのいろいろな「文の述べ方」を実際の

コミュニケーションの場

での表現意図の違いによって、義務・必要・許可の表現、確からしさの表現、疑問、確認の表現、意志、勧めの表現、依頼、命令の表現の五つのグループに分けて、その作り方や使い方、意味の違いなどをわかりやすく説明しています。各グループに練習問題が付いているので、自分のペースで勉強しながら、どの程度理解できたかを確認することもできます。また、必要に応じて関連する表現のいろいろな問題点や注意点（例えば、許可の表現に関連して「いい・よろしい・結構です」の違いなど）が「コラム」の欄にまとめ



p.12

られているので、間違えやすい表現の用法を確認することもできます。

中級以上の学習者や日本語教師が日本語文法の知識を整理し直すのに役に立つ本です。また、すべての漢字ががあるので、漢字が弱い人も利用することができます。

同シリーズには、今までに本書以外に1「はとが」2「する・した・している」3「格助詞」4「指示詞」5「も・だけ・さえなど」の5冊の本が出版されています。いっしょに紹介しておきます。

”語彙の意味を成分分析し視覚化した辞典”
ごい いみ せいぶんぶんせき しかくか じてん

『右脳を刺激する日本語小事典』
うのう しげき にほんごしょうじてん

データ

1 城生百太郎、佐久間まゆみ 2 東京書籍
じょうおほくたろう さくま まゆみ とうきょうしやく
(〒114 東京都北区堀船 2-17-1 /
とうきょうと きたく ほりぶね
TEL:03-5390-7505 FAX:03-5390-7538)
3 1996年11月 44-487-73232-8 5319ページ 62,039円

外国語を学習する時の問題点の一つに、意味の面で関連のある語の相互の関係があります。この辞典では、関連する意味の違いを視覚化して、わかりやすく示すようとしています。方法は、意味を簡素化した成分に分解し、一つの語をその成分の組み合わせとして図表や一覧表で示すというものです。これが本書の特徴となっています。本辞典の内容の、全てを理解するためには、上級程度の日本語力が必要でしょう。

見出し語の数は、114語です。これが身体、衣食、住居・輸送など12種の大項

目に分類されています。構成は、次の要素からなっています。見出し（漢字表記、発音記号、アクセント表示）、品詞（活用の種類、活用形の語尾）、意味記述、文型提示、参照語、分析、用例チェック、意味リスト、意味チャート、コラムなど。

次にこの辞典の特徴を、記述の順に見ていきましょう。まず発音記号があります。これは国際音声記号を用いています。またアクセント表記は、音響分析器による解析を基礎としています。「参照語」は、各見出し語ごとに数語から20語程度という多さです。これらが「分析」の項で相互に関連づけられながら説明されています。その説明の中では「用例チェック」の項で、×による用法の提示があります。結果は、「意味リスト」で語彙群の意味の成分が表示されます。更に「意味チャート」でそれが枝分かれ図として表示されています。このように、意

味を図表でわかりやすく示していることが、大きな特徴となっています。最後に「コラム」があります。ここでは見出し語などが対照言語学の視点から説明されています。

本書は、読んで考えるための辞典といえそうです。



p.106

海外日本語教育 Q & A

かいがい にほんごきょうい

このコーナーでは、海外で日本語を教えるときに、教師が直面すると思われる問題と
りあげ、質問に答える形で、読者のみなさんの参考になる情報を提供していきます。

Q 海外の日本語学習者が、日本語の授業の中で、現代の日本社会や日本人の生活
・考え方などを理解することができるようになるために、教師はどのような授業計画
をすればいいでしょうか。また、どのような教材を使えばいいでしょうか。

A 学習者に現代の日本社会や日本人の生活・考
え方を理解させることは、日本語学習を効果
的に行うためにも必要です。日本語が使われる場面や人
間関係についての理解を深めることは日本語のコミュニ
ケーションにも役立つからです。

日本語の授業の中で、どのような教材を使って、どの
ように、どこまで詳しく日本社会や日本人の生活・考
方を教えるかは、そのコースの目標、学習時間、学習者
の日本語力などによって違います。ここではいくつかの
授業例と教材を紹介しますので、みなさんの授業計画の
参考にしてください。

初級日本語の授業の中で

しゅきゅうにほんご じゅぎょう なか

初級ならどんなクラスでも、自己紹介の場面の会話を
教えることでしょうか。たとえば、ふつうは次のような会
話だと思えます。

< 会話 A >

春子：はじめまして、林春子です。どうぞよろしく。
ジョン：ジョンです。こちらこそ、どうぞよろしく。

社会人のクラスでなら、たぶん次のような自己紹介
になるでしょう。

< 会話 B >

山田：はじめまして、富士自動車の山田と申します。
よろしくお願ひします。
スミス：東西商事のスミスです。こちらこそ、よろし
くお願ひします。

この会話を教えるときに、ことば以外に、日本に関し
てどんなことを教えることができるでしょうか。まず、
Aの場合もBの場合も、日本人の名前の特徴について説
明することができます。たとえば、

日本人の名前は姓 + 名からできていること。例：林
(姓) + 春子(名)

佐藤、鈴木、高橋、田中、渡辺、伊藤、山本、小林、
中村という姓が多いこと。

名にはふつう男女による違いがあること。例：「～子」
というのは女性の名前。

名の付け方には流行があること。例：最近では女の子に
「子」を付けないことが多い。

もちろん、教師が一方的に説明するだけではなく、学
習者が知っている日本人の姓名をあげさせて黒板に書い
てから、説明してもいいと思います。

また、会話 B では、自己紹介のときに名刺を交換する
はずです。ですから、日本人の名刺の実物や写真を見せ
ながら名刺についていろいろ説明することができます。

異文化理解のための授業(初等・中等教育)

いぶんかりかい じゅぎょう じゅうちゅうきょうい

世界各地の初等・中等教育機関の中には、異文化理解
教育のひとつとして日本語教育を行う機関が増えていま
す。使われる教科書は、その国(または州)で作成され
たシラバスにしたがって制作されるのが一般的です。た
とえば次のリストはオーストラリアで開発された教科書
シリーズです。

National Curriculum Guidelines for Japanese 編の

YOROSHIKU シリーズ

“NIKO NIKO”(小学生向け)

“MOSHI MOSHI”(中学生向け)

“PERA PERA”(高校生向け)

この教科書の特徴は、日本について紹介するときに、
学習者の共通語である英語が必要に応じて効果的に使わ
れていることです。たとえば、学習者が知っている日本
語では十分に説明できない場合には、英語を使って解説
しています(例1)。もちろん、日本語学習もできるよ
うになっています(例2)。

YOROSHIKU シリーズ連絡先:

Curriculum Corporation

St Nicholas Place, 141 Rathdowne St. Carlton,

VIC 3053, Australia

Tel:03-639-0699 Fax:03-639-1616

日本絵・日本人をテーマにした

読解・会話の授業

読解、会話などの教材を選ぶときに、日本社会・日本人をテーマとした日本語教材を選べば、日本語の学習と同時に日本についているいろいろなことを考えたり知ったりできます。このタイプの授業を効果的に行うには、学習者が初級終了程度以上の日本語力を持っていることが必要です。以下に教科書の例を紹介しましょう。

『日本の社会と経済を読む』東照二他著、1995年、研究社（「社会編」「ビジネス編」に分かれ、20のテーマが扱われている。）

『たのしく読める日本の暮らし12カ月』国際日本語研究所編、1992年、杏文堂（日本の年中行事、日本人の1年の生活がテーマとして扱われている。）

『日本を話そう～15のテーマで学ぶ日本事情～』

日鉄ヒューマンデベロップメント/日本外国語専門学校著、1994年、ジャパントイズ（「住宅事情」「高齢化社会」「日本人の労働観」「教育」など15のテーマが扱われている。）

『日本語で学ぶ日本経済入門』藤森三男、野澤素子著、1992年、創拓社（「日本の流通機構」「日本における技術開発」「産業政策」など経済に関する10のテーマが扱われている。）

『新聞で学ぶ日本語～読んで話す現代の日本～』水谷修、信子著、1996年、ジャパントイズ（この本は『日本語教育通信』28号の「本ばこ」で詳しく紹介しています。）

学習者が主体的に情報を集めて発する授業

（大学の例）

私がインドネシアの大学で日本語を教えていたときに行った授業の例を紹介します。

「現代日本事情」という4年生を対象にした授業です。まず、「現代日本事情」を学生に理解させるために、日本の新聞、雑誌、政府が出している白書類（主に『国民生活白書』）などから読解の教材を選びました。選んだテーマは、「老人問題」「結婚問題」「教育問題」「家庭・家族」「仕事観」などです。この授業の目的は、現代日本を理解することですから、教材を読むときに、語彙や表現の説明はしますが、文法的な説明はできるだけ少なくし、内容の理解を中心に速読の方法をとりました。学期末近くになって、学生たちに「インドネシアから見た

Useful information

おせんべい

Soy sauce (or sometimes salt and vegetable oil) flavoured rice crackers often come with seaweed. The original form is *せんべい*. It is attached to sound more polite or friendly.

団地

These apartments or units are usually built by a city council or government. A number of these buildings, each usually about five stories, are grouped together in one place to form a local apartment complex. Similar units privately built are called *マンション* (manshion). This loan word is used to give these units a luxury image. *マンション* doesn't mean a separate house in Japanese.



大会

There are a lot of 大会 for student activities, especially for sports. 大会 can be used with a name of a sport (e.g. バレーボール大会) or with the name of a regional area, state, or country (e.g. 全国大会) to indicate the type of 大会.

塾

Many children attend private 'cramming' schools or 塾 after school. Some children go to 塾 seven days a week, in order to get results at school which will enable them to enter a prestigious institution at the next level of education. Other children go to another type of 塾 to gain a greater understanding of subjects and satisfaction from learning.



クラブかつどう

Many students join a school club or activity in junior and senior high school. Most of the sports clubs (e.g. volleyball, baseball and basketball) compete against other schools. Even the brass band and singing clubs enter contests against other schools.

School club activities are taken very seriously and are even continued during all the school holidays. Between school club activities and the amount of study and homework expected of Japanese high school students there is little time left for personal leisure.

はじめまして

If your Japanese student has arrived at your school for a short-term stay, you have to introduce him/her to the students. Use the example as a guide to make a short introduction. Use the example as a guide to make a short introduction. Use the example as a guide to make a short introduction.

はじめまして、
あなたの名前は_____です。
これは_____に_____です。
どうぞよろしく。



例2 『NIKONIKO』p.26より

現代日本」という共通テーマで口頭発表させ、最後に日本語のレポートを提出させました。発表やレポートを書くにあたって、インドネシア人に対するアンケート調査、インドネシアの新聞・雑誌に出た日本に関する記事、日本についての統計資料のいずれかを分析して、自分の意見をまとめるように指示しました。

学生たちが選んだ小テーマは「インドネシアから見た日本人観光客」「日本の老人」「ガイドの見た日本人観光客」「インドネシア人は日本の若者の変化についてどういう意見を持っているか」「現代日本人女性の状況」「インドネシアで出版された日本の漫画」「インドネシアの学生が見た日本の車」「日本女性の妊娠中絶」などでした。このようにすれば学生の興味に合わせた活動をさせることができますし、他の学生の発表を聞かせることによって、学生たちの視野を広げることもできます。もちろん日本語を速く読む力をつけることもできます。

担当：百瀬侑子（日本語国際センター専任講師）

海外日本語普及 総合調査会について

国立国語研究所
こくりつこくごけんきゅうじょ

所長 水谷 修
しよちよう みずたに おさむ

今、世界中のおよそ100の国や地域で、162万を超す人々が日本語を学習しています。平成9年度には、国際交流基金の7番目の海外日本語センターがロンドンに開設され、また、国内では関西国際センターが本格的に事業を開始します。一見すると、日本語教育は順風満帆に進展しているかのような印象を受けます。しかし、果たしてそうでしょうか。国際交流基金は、1993年に、海外における日本語学習者数や教育機関数、教師数などを調査しました。それと同時に、日本語教育上の問題点についてもアンケート調査を行いました。その結果、海外の日本語教育の現場では、実にさまざまな問題を抱えており、先生方が苦勞しながら教育活動を行っている様子を伺い知ることができました。学習目的に適した教材がない。日本の文化や社会についての情報の入手が困難である。あるいは、学習者は増えているのに教師の数が足りないなどといった問題です。これでは順風満帆どころか、「この状況でよくやっていけるな」というのが率直な感想です。こ



浅尾理事長（左）に答申を手渡す樋口会長（中央）

れは何とかなくはない。このままでは、日本語教育の将来は危うい。こうした問題意識から、国際交流基金では、日本語教育の現状と課題について検討を加えるとともに、今後の中長期的な施策を議論するため「海外日本語普及総合調査会」を設け、このほど答申が発表されました。

この海外日本語普及総合調査会は、日本語教育の専門家をはじめ、財・官・学界などさまざまな分野で活躍されている15名の委員で構成されています。また、調査会の審議を助けるワーキングチームとして、4名の日本語教育専門家から成る小委員会が設けられ、私は調査会の委員と小委員会の主査を兼任しました。調査会は国際交流基金理事長の諮問機関という位置づけで、平成8年7月から翌年3月までの間に4回開催され、外務省や文部省からのオブザーバー参加者も交えて活発な議論が行われました。さらに、昨年11月には、シドニー、ジャカルタ、クアラルンプール、バンコクの4都市へ調査団が派遣され、各地の日本語教育現場の視察や、関係者との意見交換を行いました。詳細な報告書が作成されましたが、この調査報告も審議に大きく役立ちました。

議事録を読み返しながら印象深く感じるのは、21世紀の国際社会における日本の立場を考えた場合、国際文化交流、なかでも日本語教育をもっと充実させること、そしてそのための制度的・財政的な基盤作りを早急に行う必要があるという点で、立場の異なる委員の方々の意見が一致したことです。これは大変心強いことでした。

答申の内容をご紹介します。現在、海外の日本語教育が抱えている問題にはさまざまなものがありま

すが、調査会では次の3つが特に重要であると考えました。

まず第一に日本語教師が不足していることです。これには、現地で日本語教師を養成できる体制をつくる必要があります。それと併行して、日本から派遣される日本語教育専門家の数を増やし、かつ派遣先の実状やニーズについて、予め十分な研修を受けてから赴任できるようにすることが重要です。

2番目の問題は、教材が不足していることです。学習目的や学習段階に応じた教材が現地主導で作成されることが望ましいわけですが、そのためには、教材開発についての研究を進め、教材開発に携わる人材を育成すること、そして、教材の材料となる映像や音声などの資料を収集し、使いやすい状態で提供できるようにすることが必要です。また、昨今飛躍的に進歩しているマルチメディアを日本語教育に積極的に取り入れていくことも、今後の重要な課題になることと思われます。

最後の問題として、学習環境を取り上げました。日本語学習者が上級レベルまで学習を継続でき、日本語

海外日本語普及総合調査会 委員名簿

(敬称略・五十音順)

1. 調査会

氏名	現職
饗庭 孝典	杏林大学 教授
猪口 邦子	上智大学 教授
上野 田鶴子	東京女子大学 教授
大賀 典雄	ソニー株式会社 会長
小塩 節	中央大学 教授
河合 隼雄	国際日本文化研究センター 所長
如月 小春	劇作・演出家
坂元 昂	放送教育開発センター 所長
篠沢 恭助	大蔵省財政金融研究所 顧問
(会長)	
樋口 廣太郎	アサヒビール株式会社 会長
藤田 公郎	国際協力事業団 総裁
ブレース・パートン	桜美林大学 助教授
(副会長)	
ユネスコ・アジア文化センター	
三角 哲生	理事長
(小委員会主査)	
水谷 修	国立国語研究所 所長
宮地 裕	帝塚山学院 院長

2. 小委員会

氏名	現職
三枝 令子	一橋大学 教授
西原 鈴子	国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部 部長
広瀬 正宜	国際基督教大学教授
福地 務	中央大学 助教授

(役職・所属等は当時)

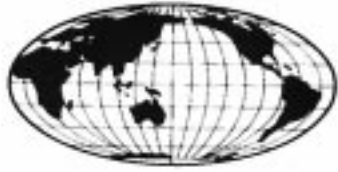
教師が充実感をもって教育活動を行える。これこそが、これからの日本語教育をさらに発展させていく上で、必要不可欠であり、学習者に対する支援策を検討しました。

具体的な施策に移りましょう。まず、海外日本語センターと日本国内のセンターの数を増やすことが必要です。英国のブリティッシュ・カウンシルやドイツのゲーテ・インスティテュート並にとは言いませんが、現在のような海外7カ所、国内2カ所というのでは、あまりにも少な過ぎます。何カ所が適当かということについては、さらに議論の必要がありますが、各種の研修事業をより大規模に、かつ本目細かに実施できるよう、少なくとも日本語教育上の拠点と思われる都市にはセンターが設置されている必要があります。それと同時に、教授法やカリキュラムについての研究・開発機能や、また、いろいろな教材や映像・音声などを収集したリソースセンターとしての機能も充実させるべきでしょう。このリソースセンターでは、日本の社会や文化についての情報も収集し、教材制作や教室活動に役立つようマルチメディアを積極的に使って発信することも考えなければなりません。

次に、各国の高等教育機関に対する支援策を強化することです。国際交流基金では、従来から大学の日本語研究学科を中心に支援を行ってききましたが、初等・中等教育レベルの日本語教師を育てるため、教員養成大学への支援も新たに実施することが必要です。これらの施策が軌道に乗れば、さきほど取り上げた教師と教材が不足しているといった問題の解決に、随分役立つものと思われれます。

最後に、学習者への支援です。現在も行っている成績優秀者研修をもっと大規模にして、日本に対する理解を深めてもらわなければなりません。また日本語能力試験も、試験の回数や会場を増やして、受験しやすい試験にすることが必要でしょう。

ページに限りがあるため、概略しかお伝えできないのが残念ですが、なによりも重要なのは、これらの施策を着実に実行に移していくことです。財政当局との粘り強い交渉が求められますし、また「なぜ日本語教育が必要なのか」を、広く一般の人々に理解してもらえるよう努めなければなりません。険しい道のりかも知れませんが、明るい未来を信じてともに頑張りましょう。



ここに掲げるニュースは、国際交流基金日本語国際センターが入手した日本語教育に関する情報の一部です。各ニュースについて、問い合わせ先がわかっている場合には明記してありますので、詳細はそちらへお尋ねください。

ニュース

1996年度日本語能力試験

昨年12月8日に国際交流基金と財団法人日本語国際教育協会が共催した1996年度日本語能力試験の結果がまとまりました。試験は日本国外31の国・地域、70都市と日本国内6地区で行われ、日本国外で70,758人（前年度比約14%増）、日本国内で25,382人（同約4%減）が受験しました。

各級の受験者数、認定者数、平均点は、別表のとおりです。なお、1997年度の日本語能力試験は、1997年12月7日（日）に実施される予定です。

		受験者数 (人)	認定者数 (人)	認定率 (%)	平均点 (400点満点)
国外	1級	16,980	4,395	25.9	238.8
	2級	18,402	4,714	25.6	207.0
	3級	19,137	8,857	46.3	233.2
	4級	16,239	6,038	37.2	216.8
	小計	70,758	24,004	33.9	
国内	1級	15,867	5,688	35.8	251.4
	2級	4,714	1,703	36.1	221.8
	3級	3,220	2,346	72.9	276.5
	4級	1,581	1,046	66.2	262.9
	小計	25,382	10,783	42.5	
合計		96,140	34,787	36.2	

編集部から

今回の表紙エッセイは、比較演劇学者の河竹登志夫先生にお書きいただきました。先生は、歌舞伎、能、狂言などの海外への紹介、日本演劇研究者の指導、育成などの実績により、1995年度に国際交流基金賞を受賞されています。

前号、27号の教育実践レポート欄「NRW州立言語研究所」の報告をしてくださいました、的場さんのお名前が間違っていました。正しくは、的場麻理さ

s試験の詳細についての問い合わせ先

日本国外：
国際交流基金日本研究部企画開発課
〒107 東京都港区赤坂1-12-32
アーク森ビル21階
TEL：03-5562-3525

日本国内：
財団法人 日本語国際教育協会
事業部 日本語・統一試験課
〒153 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL：03-5454-5215

海外日本語教師短期研修 (春期)

海外の日本語教師の教授能力の向上を図るため、日本語教師を2ヵ月間招へいし、日本語と日本語教授法の集中研修を実施しました。

全体を中等教育機関教員グループと高等教育機関教員グループとに分け、それぞれの教育現場に即した研修を実施しました。

期 間：平成9年4月16日（水）～6月

11日（水）

参加者：計14ヵ国、39名
内 容：授業（日本語、日本語教授法、日本の文化と社会等）
課外研修（書道、茶道デモンストラーション、研修旅行等）

ドイツ語圏大学日本語研究会 シンポジウムの開催

ドイツ語圏の各大学で日本語教授の教鞭を執る教師達のシンポジウムが3月21日～23日にザールブリュッケン大学で開催されました。テーマは、CAIとしての日本語でした。ワークショップが中心となった今回シンプでは、コンピュータを使った日本語教育の可能性が示されました。とりわけ、日本語国際センター日本語教育フェローであったヤボニクムのシュルテ・ベルクム氏がその研究成果を参加者に紹介した際には、参加者から多くの質問・意見が寄せられました。

(ケルン日本文化会館発)

『日本語教育通信』 第28号

1997年6月発行

発行・編集
国際交流基金 日本語国際センター
〒336 埼玉県浦和市北浦和5-6-36
TEL 048-834-1184 FAX 048-831-7846

編集協力
財団法人 国際文化交流推進協会

The Japan Foundation
Japanese-Language Institute, Urawa
(6-36 Kita-Urawa 5-chome, Urawa-shi, Saitama 336, Japan)

©1997 by The Japan Foundation

(表紙イラスト：村井宗二)